

# TAKAOKA CRAFT COMPETITION 2016/30th



「make by hand」か「Crafting」か。  
「手で作るもの」と「力を込めてできたもの」。

第30回高岡クラフトコンペティションは「クラフトは、どこへ向かう」をテーマに、2016年7月21・22日の2日間に渡り、行なわれた。新たな審査員として高岡市デザイン・工芸センター所長 高川昭良氏、ランドスケーププロダクツ代表 中原慎一郎氏、ユニット家具作家/ンモオデザイン 下尾和彦・下尾さおり氏が加わり、白熱した議論が繰り広げられた。

## ――拾い上げたい作品と出会う期待を。

「もの」の居然たる姿を後ろから眺めているような空気が、審査会場を包んでいた気がする。

高岡クラフトコンペティションは2016年、節目となる30回を迎えた。今年度の応募者は225名、作品数は1015点。金属部門の増加、漆器部門の横ばいに対し、木工・陶磁器・ガラス部門が減少した。昨年からの応募変更点は2つ。審査の際に改めて精査をするが、応募段階では出品者自身がコンテンポラリー・ファクトリーのいずれかを記入すること。コンテンポラリー部門において、複数制作可能なものから1点ものでも可能となったこと。以上2点に留意し、審査指針の協議にうつった。

「伸びしろや幅の広さを感じるようなもの」「使うシーンが浮かぶ、拾い上げたいと感じる作品」「売り手として自分が関わりたくなるもの」「メディアとして取り上げるべきもの」と、各々の視点からの指針と共通基準が挙げられる。「コンペの意義をもう一度考え直したい。『make by hand 手で作るもの』ではなく『crafting 力を込めてできたもの』を選びたい」という審査委員長 大治将典氏の発言後、1次審査が行なわれた。

1次審査終了後、審査員全員で会場を回り、票が入っていない作品も含めて再度検討する。新たに審査員として加わった高川氏、下尾氏、中原氏の専門解説もふまえ、結果101種の入選が決定した。



## 大治 将典 ／手工業デザイナー

建築設計事務所、グラフィック事務所を経て、「Oji & Design」設立。日本の様々な手工業品のデザインをし、それら製品群のブランディングや付随するグラフィック等も統合的に手がける。手工業品の生い立ちを踏まえ、行く末を見据えながらデザインをしている。

## ――ゼロの視点。1票の重さ。

2日目。初日に感じた空間的特性が強まっていた。入選作品が美しく並べられているのに、思わず言葉を発してしまうような圧倒的な存在感を見つけられずにいる。

入賞作品の審査が始まった。30回目の開催ということで、昨年までの各賞に加えて金属が使用されているものから選定する「メタル奨励賞」、漆が用いられているものから「漆奨励賞」、35歳以下の出品者の継続サポートを念頭に置いた「金屋町楽市賞」が設定された。また主催する高岡商工会議所の創立120周年を記念し、高岡市内の出品者から優秀なものを表彰する「地域特別賞」も設けられた。

イレギュラーな形ということもあり、2次審査で入選入賞の境界線上にあるノミネート作品を30点程選定し、3次審査以降、ノミネート作品の中から各賞を決定することになった。3次審査の中でただひとつ、満票だった作品がある。「硝子石」である。

高橋：議論なくふわっと票が入りましたね。  
野田：多彩な技法なんです。中に細かい



## 安藤 雅信 ／陶作家・百草庵主

美大卒業後、多治見市にて焼き物を学び、20代は現代美術作家として活動。後に焼き物制作を生業と決め、和洋問わず使用できる千種類以上の日常食器の定番を制作しつつ、茶道具や彫刻的作品も制作。1998年には、古民家を移築しギャラリー百草開庵。

気泡をたくさんいれたり、色が何パターンかになっていて、フォルムも無理のない綺麗な形です。完成度と技術的な部分も良い。

下尾：種類が多いですが、あるタイプのはすごく好きですね。同じものばかりだったら選ばない。

安藤：技法を増やしたことで、少し欲張ってるかなと思います。技法が形と合っているかどうかという話ですよ。

大治：中のレースと外のフォルムと渾然一体なのが魅力的。フォルムも嫌じゃない。自然に吹くという逆に難しいことをして、自然な形になっている。買ったどこに置こうかなと考えています(笑)。満票ですが、コンテンポラリー部門グランプリということでもよろしいでしょうか。(一同拍手)

大治：次ですね。「内包空間 -茶碗-」抹茶碗-」がすごく気になったんですよ。

中原：僕は技術的にこの作品がグランプリだと思う。

下尾：底に難があります。もう少し大きく作ってくれば良かった。全体的にグランプリを狙ってくる人はいるのかなと思ってしまいますね。

安藤：二重構造はひとつひとつを別々で作って後でくっつけるにしても大変な作業。どのようにやっているのかな。底のところが失敗してるんです。

中原：それがまた良い。コンテンポラリーな感じがしません？新しい。

岡本：これから先を示唆している。まさにコンテンポラリーですね。

高川：挑戦していますね。チャレンジという意味ではこの作品ですね。



## 高橋 俊宏

／**朝霞出版社Discover Japan 統括編集長**

2009年に日本の魅力、再発見をテーマにした雑誌「Discover Japan」を創刊、編集長を務める。雑誌を通して地方活性の活動にも積極的に関わる。場所文化フォーラム理事、地域ブランディング協会代表理事。「The Wonder500」アドバイザー、経済産業省アドバイザーなど。

**大治:**ではコンテンポラリー部門優秀賞ということで。(一同拍手)

ファクトリー部門では「QUILT」「ひらり」、「錫色酒器」「hang storage」「竹紙とんぼ」「アルコールランプ HON-NYO・DEN-EN」「かさなり」について議論がなされた。

**大治:**結構かぶりましたね。漆がこんなに残ったのは久々な気がします。

**安藤:**「QUILT」は漆のいやらしさがないので、新しさを感じます。完成度が高い。

**高川:**これは高岡にもう1人しかいない職人さんの手彫りなんです。

**中原:**そのわりに値段が安いですね。

**大治:**伝統工芸の技術が違う形で消化され、今使いたい感じになったことに好感が持てる。ハッと見は地味ですが、この値段で作り続けられるのであれば、ちゃんと売れる。

**下尾:**もう少し綺麗に作って欲しい。ピッチがすごく気になるんです。

**岡本:**その揺らぎが良いんじゃないかな。やわらかさが出ていて。

**安藤:**明らかに寸法が違うから、わざとかもしれないですね。

**大治:**グランプリをまず決めましょう。下尾さんが該当なし。他の方は「QUILT」ということで、ファクトリー部門グランプリ決定です。(一同拍手)

**大治:**いつもグランプリは混乱がないんですけど、その後から喧々譁々なんです。

**高川:**「ひらり、」は自然の花びらの感じがそのまま出ていますね。

**大治:**漆の艶が出ている方がいいなと。磨くのは大変ですけどね。

**安藤:**樹脂に線が入っていて、漆はそん

なに塗ってないと思います。展開力を色々見たいな。

**岡本:**日本人らしい素直な感覚を形に持っていった、その着眼点がいいですね。

**安藤:**「かさなり」は観光客のギフトにいいのでは？

**岡本:**目盛りがすごく綺麗ですよ。

**高川:**伝統的な着色技法を使っているんですね。黒染めかな。

**大治:**もう一工夫して欲しい気がするんです。

**安藤:**展開じゃないですか？何でもないものさしにしているところが、逆に良いのかもしれない。普通だったら価値を落とすってことになるけど、新鮮なんです。

**高橋:**お香とかで、窓側にキャンドル置きますよね。「アルコールランプ HON-NYO・DEN-EN」はインテリアとしてあるといいな。

**岡本:**玄関にワンポイントで置いておけるし、何かあった時に役立つんじゃない。

**中原:**用としてのランプは普通かもしれないけど、こういうチャレンジってあまりないですね。飲食店でも使いやすそうですよ。

**下尾:**「hang storage」は丁寧で綺麗ですよ。



## 中原 慎一郎

／**ランドスケーププロダクツ代表プロデューサー**

1971年、鹿児島県生まれ。ランドスケーププロダクツ代表。オリジナル家具等を扱う「Playmountain」、カフェ「TasYard」、ギャラリースペース「CURATOR'S CUBE」等を展開。また住宅/店舗のデザイン業務、イベントプロデュース/ブランドディレクションを手がける。

**安藤:**発想の新しさはありますね。

**岡本:**こういうものは結構あると思うんですけど、プロポーシオンは素晴らしい。

**大治:**地味な家具をここまで本気に仕上げているのがすごく好きです。そこにサッと掛けても佇まいが美しくなりそう。

**大治:**では拳手しましょう。「アルコールランプ HON-NYO・DEN-EN」が全員一致でファクトリー部門優秀賞に決定です。(一同拍手)

**大治:**票が半分以上入っている「ひらり」、「かさなり」「hang storage」については、奨励賞決定でよろしいでしょうか。(一同拍手)

**岡本:**「ストライプ I」ですが、ブランケットの膨らみを出すために、羊の毛質をセレクトしています。

しかも、特徴が出しにくい国産羊毛にトライしている。この作品では房がアクセントになっていますが、房のためだけに緋で黒く染めた緯糸を入れて、より絨毛感を出している。さりげなく、手がかかっていますよ。こういう仕事は垢抜けるのが難しいけれど、うまくまとめてあります。肩にかけてもすごくかわいい!

**野田:**この方は今までコンペとかで出したことがあるのかな？

**岡本:**テキスタイルは地道にやってらっしゃる方が多いですからね。紡ぎも織りもよく分かっている方ですね。

**野田:**心が動きました。置かれている時よりも、羽織った時、機能的に美しく見えた。

**下尾:**「ジャム匙」はアイデアが良いですよ。瓶があればここでも再現できていいなと思ったんですけど。ジャムをつけ

た後に、立てかけるだけでいい。形もすんなりしています。

**大治:**全部刃物だけで仕上げていますね。2000円って安い!

**下尾:**ここまで形を変えてくるかと。おそらく用の美ですよ。これだと瓶の淵の届きにくいところまで綺麗に取れる。

**大治:**すごく愛嬌がある形に落とし込んでいるのも好感が持てます。

**岡本:**使ってみたくなりますね。

**安藤:**隙間産業賞っていうのがあったらいいですよ(笑)。こういうニッチな所をよく思いついたなど。

**大治:**「ストライプ I」と「ジャム匙」が一步抜けましたね。では奨励賞で決定です。(一同拍手)

## \_\_\_コンペティションで受賞するということ。

新しく設けられた賞の審査は、あつという間に時間が過ぎていく。どれだけ話しても足りない。審査員たちは作り手が捻り出したアイデアの向こう側を何とか汲み取ろうとし、費やした労力や技術、時間を自分たちのところに引き寄せて想像する。そうしてこのコンペティションの意義を確実に作る人の元へ届けようとする。まるで手と手が繋がっていくように。

**大治:**特別賞にうつりましょうか。

**下尾:**「水の輪」の金魚がすごく良いんですけど。

**安藤:**香立てだから、金魚は受け皿とセットで作らないと説得力がないような

気がします。



## 岡本 昌子

／**(公社)日本クラフトデザイン協会理事長**

テキスタイル作家。羊毛の手紡ぎを主としつつテキスタイル全般に関わる。多摩美術大学特別講師。テキスタイルの魅力を伝えるワークショップや、個展・グループ展にて活動。NPO法人NSCJに参加し、カンボジア地雷除去地の綿花栽培と布作りに関わっている。

**下尾:**難しいですね。でも、受け皿がなくとも可愛い。形が美しい。

**岡本:**素敵な蚊遣りが欲しいと思ってもなかなかないんですよ。水紋に見立てた発想はいいなと思いましたが、金魚がリアルすぎてどうかなと。でも、ずっと見ていると良くなってきました。

**高川:**ロストワックスですね。素晴らしいクオリティ。

**下尾:**「plants-tsuru」はどうですか?造形が綺麗で作っているところを想像してしまいます。

**大治:**レイヤリングが魅力的ですね。

**野田:**「rinkaku」は、さっきの「ストライプ I」と同じで、実際にかけてみると良さが出る作品。

**岡本:**漆らしくない軽やかさがありますね。付けいて楽だし、それでいて存在感がある。

**大治:**漆っぽくない表現なのに、漆にしかできないことをしている。漆が固まる性質を使って、糸を成形して。インスタレーションの作品も綺麗でしたが、身につけるものにも落とし込めて、ちゃんとそれが成立するような形になっています。

**安藤:**漆の新しい表現の仕方ですよ。ジュエリーという用途も。

漆奨励賞は「rinkaku」、メタル奨励

賞に「plants-tsuru」、地域特別賞には「水の輪」が選ばれた。

## \_\_\_作家の活動をサポートするという新しい試み。

金屋町楽市賞は若い作家の活動を支援するために作られた希有な賞である。地域や素材は不問で、作品の展示販売サポートを1年間受けることができる。

**大治:**僕がもし作家であればどの賞が欲しいかな。お金じゃない気がする。

**安藤:**展覧会のサポートだから、他の作品も見てみたいと思える作家を選んだほうがいいんだよね。ちょっと未熟でも可能性、伸びしろを感じる作家を。

**岡本:**販売販路のサポートとか、企画展に招待してもらって、作品を露出させるチャンスが貰えるということですよ。

受賞したのは、『ひかりのいれもの Lighthouse』(ガラス)、「水滴-みずたまりの詩-」(ガラス)、「kuru-co」(漆・和紙)の3作品である。

**大治:**「ひかりのいれもの Lighthouse」は、下のヒヨロンとしたボタン電池のコードがイマイチでもったいない。替えるか探すが作るかなりして、上の部分だけで納まるとすごく綺麗だと思う。

**安藤:**LEDを使ってインテリアの小物にするという発想が新しいですよ。

**野田:**吹きガラスで作っているけれど、蓋を合わせる技術が高い。仕上げも丁寧で、考えてあると思う。

**岡本:**明かりが点る入れ物って、ありそうでないですよ。

**大治:**電気を使った、キノコのランプを



## 野田 雄一

／富山ガラス工房館長

1981年瀬戸内寂庵の「寂庵塾」を卒業、ガラス工芸作家として、国際ガラス工芸展・銀賞(1988年)、第4回円空大賞展・円空賞(2007年)をはじめ多数の受賞、日本現代ガラス展(スペイン)など国内外展に出品し個展も多数開催。2006年からは富山ガラス工房館長を務める。

作っている台湾の作家がいらして、とても素敵なんです。そういうのがもっと出てきてもいいな。

中原:オイルランプでも良かったかもしれないね。

大治:そうですね、上がちょっと開いていてね。応援したい。

安藤:強度とか色々問題はあろうけど。頑張してほしい。

岡本:そうですね。

野田:『氷滴 - みずたまりの詩 -』は、板ガラスの展開方法が意外と凝っているんです。板ガラスをひとつひとつ丸く切ったり削ったりして、それを1枚板の上に並べて、ヒュージングさせている。手間暇がかかっていると思います。器っていうのを意識しているから「もの」自体が主張するのではなくて「もの」を置いて完結するような形じゃないかな。

安藤:単純なことでデザインしているから、そこを応援したいと思う。

岡本:『kuru-co』はまだまだこの路線でやれると思うし、展開してほしいですね。次作が見たいです。

大治:完成度が上げられそうな伸びしろがある。まだ漆も上手に塗れると思うし、フォルムも変えられると思う。

高川:このパターンでいろいろ展開できるので楽しみ。木の感じが出ているところがいいですね。淵の部分には和紙を貼って、ちゃんと強度を持たせている。全部にやってしまうとコストがかかるし。

安藤:それだと面白みがなくなるからね。

## 入選と入賞の境界線。

様々な議論が繰り広げられる中、最後まで賞候補に残っていた作品たちがある。

『ブチ酒器セット』『キューブな花器』『コハクチョウ』『syaku』『錫色酒器、錫色片口』『珈悦』『竹紙とんぼ』『檜割抜杯』『フロアテーブルHIKIMASU』『苔玉りん』『bird songs』『Bamboo Tray』『彩』『木ノ実フル』『ガラスの指輪』の16点である。その中でも深い印象を残したいいくつかの作品についての記録を残しておきたい。

高川:『錫色酒器、錫色片口』は全部叩いて造形していますね。この模様は蠟か何かを流して、研いで作っているのではないかと。形は非常に綺麗だと思います。

安藤:新しい表現はされてますか?

高川:加飾自体はあります。全体のバランスと加飾のバランスが整っている。

中原:『檜 割抜杯』新鮮味があります。漆を見て、初めて明るい気持ちになった。

岡本:そうですね。さらっと見えそう。応援したいですね。

中原:『彩』はある程度は攻めてるなと思います。素材もチタン。

下尾:グネグネしていますね。

中原:これが美しいと思っているんだけどね。

高川:チタンの作品で完成度の高いものは結構ありますからね。

岡本:着色自体も珍しくないですが、シンプルに曲げたのがいい。ただ仕上げが気になりませんか。

大治:『コハクチョウ』はまた圧倒的にインパクトがありますね。

中原:テクニックはすごいと思うけど、全うですよ。

安藤:20年前に入っても違和感がないなあ。新しさが無い。

高橋:『竹紙とんぼ』がとても好きなんですけど、どうでしょう。

大治:完成度は高く魅力的なんですけど、これはプロダクトだなと思って。それが何か違うかな。商品自体は魅力的で、パッケージを筒状にしたのもいいと思うんですけど。

安藤:『ガラスの指輪』のような作品は、今までもあったんじゃないですか?

大治:プロダクトのコンペで見たことがあるような感じがするアイデアで、クラフトとしての魅力という意味では…。

中原:単純な気がしますね。

今年も長く暑い2日間が終わった。第30回という節目の年に、私たちは賞を選ぶということの意味とコンペティション形式の意義を、他でもない自分自身に問うたのではないかな。もしかしたらそれは原点に立ち返ることはなかったか。賞は審査員からのメッセージである。1015点の作品ひとつひとつと向き合い、「もの」の回りを想像し、どのようにしたらこの作品がもっと映えるかと議論し合う。「きっと出会う」と「もっと出会いたい」の狭間で、来年にむけて誰かが、すでに走り始めていることを願う。



## 高川 昭良

／高岡市デザイン・工芸センター所長

1975年高岡の伝統工芸を支援する公設機関、高岡市商工奨励館に勤務。

金属工芸の作品を制作し、グループ展や各種展示会に多数出品。日本クラフトデザイン協会会員。2007年よりデザイン工芸センター所長を務める。